

REC

TECHNICAL REPORT No.0007

I S S N 0918-2861

RECT-SS360

REC まちづくり研究助成研究報告書

双子座館の利用促進のための商品開発

— まちづくりグループ〈北の星座共和国建国推進事務局〉の活動 —

For Developing a New Item of Local Products

Report on Community Making Activities of Northern Hokkaido Regions

(解説)

越塚 宗孝

noted by

Munetaka KOSHIZUKA

Feb. 1994

静 修 学 園

北海道環境文化研究センター

HOKKAIDO RESEARCH CENTER OF ENVIRONMENT AND CULTURE

はじめに

この報告書は当研究センターのまちづくり研究助成により、道内まちづくりグループの人たちが行った研究活動の成果をまとめたものです。本稿『双子座館の利用促進のための商品開発』は、北海道上川郡下川町を拠点とする広域まちづくりグループ・北の星座共和国建国推進事務局が執筆したものです。冒頭に掲載した本報告書の「解説」は、当研究センターの越塚主任研究員に担当してもらいました。

当研究センターは旧・静修短期大学北海道生活研究所を改組し、北海道環境文化研究センターとして再出発しました。学校法人静修学園は平成5年度に、4年制の静修女子大学（人文・社会学部）を開学させましたが、研究センターの活動は学園の新大学設置と連動して、平成4年度から実質的にスタートしたわけです。

当研究センターは、大学と短期大学の研究機能の集結点であるだけでなく、〈道民に開かれた交流ネットワークの拠点をめざして〉というスローガンのもとで、新しい試みを開始しています。その1つが道内まちづくりグループの研究活動への助成事業です。平成4年度は数多くの応募の中から「北の星座共和国」のほかに、「ほべつ町民劇場」の『原木流送仕事唄の調査と新しい継承について』が助成対象に選ばれました。後者については、本報告書の続刊として出版されます。

研究活動は研究者や大学の教員という専門職者だけが担うものではなく、まちづくりグループのように水準の高い民間人にも、研究の機会が与えられるべきです。もし在野で研究の契機を求めているばあいは、それを支援するのも大学の役割といえます。当研究センターではほかにも、研究自由人（留学研究員）の制度や移動大学講座、オープン・カレッジ等があり、大学と地域社会を結ぶ最大限の可能性を追い求めています。

この報告書がまちづくりグループ、行政担当者、研究者などのあいだで広く活用されることを願っています。

北海道環境文化研究センター所長
大 山 信 義

【解 説】

北北海道のまちおこしグループ〈北の星座共和国〉 『双子座館の利用促進のための商品開発』について

越塚 宗孝

当研究センターが公募した〈まちづくり研究助成〉の選考にあたり、選考委員の一人として、本研究を推挙した最大の理由は、北北海道の地域づくりを進める人々の知恵とパワーを評価したからである。遊び心を動機として、数々の活動と成果をみせてきた北北海道まちづくりグループの人びとには頭の下がる思いがする。

1. 北の星座共和国・北の遊星人について

まずは当研究センターの助成制度に応募した「北の星座共和国・北の遊星人」について述べることにしよう。北・北海道（道北）の活性化を推進する人々は“北の遊星人”と呼ばれる。そして、彼らが目指すのが北の星座共和国づくりであり、北の星座共和国建国の推進母体が北の星座共和国建国推進事務局である。事務局は、現在、下川町に置かれており、谷一之さんが事務局長として活躍されている。

北・北海道という広域的な地域づくりが彼らの目標であり、特定地域のまちづくりを広域に展開しようとする点が特徴である。既に、個々の地域では、独創的なまちづくりが進められてきたのであるが、北・北海道という広大なスケールの地域づくりを意図したのである。

1988年から始められた「北の星座共和国構想」は、次第に具現化してきたといえよう。まずは、推進母体の設立と運動に参加する人々の呼称づくりが行われた。

その結果、平成元年9月24日に名寄市でスタンザム（「連なる」という意味のSTANZAと「である」という意味のAMの合成語）と称する連絡会議が開催され、その会議で「北の星座共和国建国推進事務局」が正式に認知された。以後、この組織が建国に向けての推進役となったのである。現在、北・北海道の44市町村から構成されているが、オープンマインドの思想に基づきいつでも参加地域や人をむかい入れるという意味で「45α」のキャプションが使われている。

2. 北の星座共和国・北の遊星人が目指すもの

第3回北の遊星人連絡会議、士別スタンザムが平成2年9月24日に牡羊座のマチ、士別市で開催された。その時の議事内容で北の星座共和国構想の意義、彼らの考え方等をみてみたい。それによれば同国づくりの意義は、次のように述べられている。

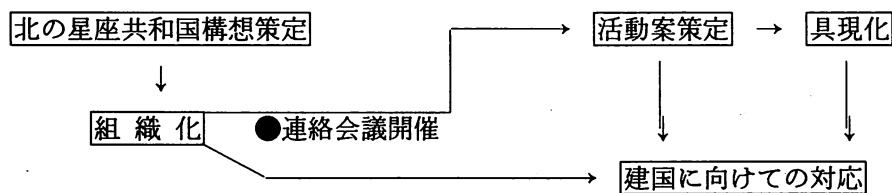
- 1 北・北海道全体の結束を強め、地域交流を活発にする。
- 2 広域的な活性化を促し、地域活動を多く作る。
- 3 広い範囲を集約したPRから観光客誘致効果を高める。
- 4 北・北海道の各地域を再発見する認識が地域内の地元のファンを作る。
- 5 民間活動を導入することで、北・北海道全体の活力を盛り上げる。

6 様々な対策による地域交流やビジネスチャンスを作る。

トータルイメージを星座に求め、各市町村の連携による相乗効果の発揮、並びに、北・北海道から中央部への情報発信が彼らの狙いである。また、そうした活動の担い手は、民間のみならず、公的機関や学界からも求めたいと意志表明しており、閉ざされた世界でのまちづくりから開かれた世界でのまちづくりを目標としている。

(北の星座共和国推進事務局設立の経緯)

上記の考え方を進めるためには、どうしても運動の母体が必要とされた。第1回のスタンザム（平成元年名寄市）において、推進母体の事務局が正式発足し、次のような活動の流れが示されたのである。



3. 活動の骨子

彼らの活動の骨子は、次のとおりである。活動の担い手募集、商品開発等幅広い展開を目指している。

- ・遊星人募集
- ・人材ネットワークづくり
- ・情報収集、発信
- ・イベント実施
- ・各種商品開発
- ・自治体、地域、関連企業への対応
- ・インフォメーション体制の確立
- ・会員制度導入の検討

現在、実施されている活動のひとつ、「遊星人クラブ」は、北の星座共和国のファンクラブ組織である。年会費2,500円を払うと海産物、イベント情報が送られてくるのである。かに座のマチ、枝幸町や花の浮島座のマチ、礼文町、さそり座のマチ、剣淵町等の楽しい情報が会員に伝達されるのである。

(スタンザムの内容について)

地理的に離れた仲間たちが一同に結集するのが、スタンザムである。平成元年の名寄スタンザムでは、前述の議事の他、ゲストスピーカーを招いての講演が行われている。また、「十夢宗谷の冒険」、「オホーツクサイクリング」、「オロロンライントライアスロン」、「サンロードハネムーン」、「オアズマン構想」等の各地の事例発表が行なわれ、盛り上がりを見せたのである。

スタンザムは、その後、土別、和寒と継続して開催され、今年、平成5年は、風連町を舞台に10月に開催される。スタンザムは、北の星座共和国にとって、人材ネットワークづくりの場でもあり、外部からの人と情報流入の受皿とも言えるものである。当研究センターも微力ながら昨年よりスタンザムの後援団体として名を連ねている。

4. 報告書の要約と解説

本研究テーマは、「双子座館の利用促進のための商品開発」である。北の星座共和国の一員である双子座のマチ、美深町に建設された物産館、双子座館で販売するための商品に関する研究である。本論では、地域づくりに対する考え方、双子座館の建設経緯、広域ネットワークづくり、各地の商品事例等について記述されている。地域作りの発想、実現をプロダクトプランニングの視点から扱ったところが特色と言える。

本論の冒頭に、「独立国運動にマニュアルというものはないであろうから、自らの創造と知恵で築き上げていかなければならない」と述べられている。確かに、マニュアルはなく、規格化、標準化等の合理性追求のための概念は存在しない。

しかし、非合理的ではあるが、面白さ、楽しさといった面を追求できるのである。例え、マニュアル化された地域づくりがあったとしても、そんな面白み、楽しみに欠けるものに誰が手弁当で参加するだろうか。私は見向きもされないと信じている。故に、彼らの主張である「自らの創造と知恵」という考え方に同調するのである。

彼ら、北の遊星人たちは、地域づくりの広域化を目指して活動している。北の星座共和国建国推進事務局は、遊星人たちの城であり、その城には44市町村の騎士たちが集まるのである。英国代表のラグビーチームは、ブリティッシュライオンズと名付けられている。5ヵ国対抗ゲームにおいては、イングランド、ウェールズ、スコットランド等独立したチームで戦っているが、一度、英国代表に選ばれるとブリティッシュライオンズのメンバーとして誇りを持って能力の発揮に努めるのである。

北の星座共和国は、ラグビーに例えるなら、44市町村からなる北・北海道代表チームと言えるのではないだろうか。事務局長を務める下川町の谷一之さんは、チームの戦い方を球だして決めるスクラムハームであると思う。本論で、「北海道内の独立国は個性が強く、つわもの揃いである」と述べているが、特に、北の星座共和国に参加している44市町村の選手にその言葉はあてはまるのである。そして、このチームの強みは、いつでもあと1名の選手を迎え入れると主張している点である。

さて、美深町は、町営の物産展示館、双子座館を国道40号沿いに建設した。運営は、第三セクター、(株)アウルが行うことになり、合わせて館内に「北の星座共和国星座グッズコーナー」が設置されることになったのである。これを契機に、北の星座共和国事務局（以後、事務局と記述する）は、星座グッズの開発を進めることになったのである。本助成金、20万円はこのための研究費にあてられたのである。

《先進地視察》

研究チームは、まず、道内の観光施設にどのような商品が置かれているのか、調査を行った。調査対象は、登別伊達時代村、室蘭市内の専門店、芦別市のスターライトホテル等である。商品構成、商品価格、ディスプレイ、売れ筋商品等について観察と聞き取りが行われた。

特に、星をテーマにまちづくりを進める芦別スターライトホテルに置かれている「星座関連グッズ」は参考になったようである。また、室蘭でみつけた「風呂用グッズ」にも関心を持ったようである。以下、観察・聞き取りの概要を示すことにする。

調 査 対 象	コ メ ン ト
登別伊達時代村	<ul style="list-style-type: none"> ・一番売れる商品は饅頭 ・千円前後の商品が売れる ・家庭で遊べるもの ・大きい物は売れない ・品物に観光地名が入っている。
室蘭専門店	<ul style="list-style-type: none"> ・若者うけする品物 ・風呂用グッズ
芦別スターライ トホテル	<ul style="list-style-type: none"> ・星グッズ豊富 ・600円～ 1,000円

《マーケティング会議・商品化》

先進地視察後、商品製作、販売ルート、商品管理等を議題に会議がもたれた。特に、上川北部の地域性における販路が問題となったようである。メジャーな観光地を持たない地域に彼らの商品が受け入れられるかどうか不安を持ちながらのスタートであった。

そのような状況の中、彼らが注目したのは、温泉地であった。年間、7万人の入り込みのある温泉地の宿泊施設に販路を求めることになったのである。

上川北部だけでも10市町村に9箇所の温泉地があり、最も販路としては有望とみられたのである。さらに、地域と密着したそのような場所に販路が開拓出来れば、北の星座共和国の精神に準拠したものになると考えたのである。

彼らの星座グッズの販売計画は、既製品の販売から開始された。星座の下敷、星座のしおり、コースター、キーホルダー、グラス、スプーンセット、ティッシュペーパー、トラベルセット等、低価格商品の選別と販売であった。続いて、北の星座共和国ロゴ入りの星座タオルが販売され、オリジナルグッズ、星座のお守り石も製作、販売された。販売ターゲットは、占いを好む若者に絞られた。占いブームを背景にストーリー性を持たせた「オリジナルグッズ」の製作は、概ね、上手く進んだようである。

素材は、12種類のブラジル産の石である。それぞれの星座に石ことばをあてはめ工夫を懲らした。例えば、双子座には、アゲーテの石、石ことばは、勝利、楽しい夢といった具合にである。

次に、双子のふくろうをあしらった人形が商品化された。双子座館のキャラクターであるふくろうを素材に、つがいのふくろう、ポルックス君、カストルちゃんと名付けなれたメルヘンタッチの人形である。価格は低めに抑えられ、そして、商品の汚れを防ぐため、一つ一つ袋詰めされた。加えて、オリジナルテレカも商品化された。地球環境保護のメッセージを入れた北の星座共和国テレフォンカードである。

彼らは、オリジナルグッズの商品化にあたり、専門家の意見を聞いている。コピーライター、インテ

リアコーディネーター、コンサルタント、デザイナー等から様々な角度のアドバイスを受けての前述の「お守り石、人形、テレカ」を開発したのである。

彼ら独自のプロセスで開発された商品は、運動精神である自らの創造と知恵を源泉としている。本論をご覧になる皆さんは、「よくある商品か」と思われるかも知れないが、それらの商品が生まれたプロセスを評価していただきたいのである。

《今後の商品開発》

双子座館の「北の星座共和国グッズコーナー」には、今後、新たな商品が並ぶことになろう。同国が販売を予定しているものは次の通りである。

販売予定商品	
・「あなたが星い」	星座の薫製かまぼこ
・「熊笹バランス茶」	熊笹を使用したお茶
・「液体洗剤」	廃油を再利用した洗剤
・「温泉の素」	入浴剤
・「絵はがき」	

5. 最後に

彼らの商品開発の動きには、利潤感覚と共に公益感覚も感じられ一味違う様相をみせている。話はわかるが、下川町のオリジナル、アイスクャンドルはヒット商品である。下川町の気候を生かした心暖まる商品であり、全国に、ゆうパックを通じて発送されている。こうした下地が今日の商品開発に生かされているのだと思う。

双子座館の利用促進プログラムは始まったばかりである。商品開発を契機に北・北海道におけるキラ星になることを期待したい。さらに、彼らも望んでいるように、他の市町村においても星座グッズコーナーが設置されることを期待したい。

北の星座共和国づくりは、ここ3年間でかなり進んだと考えている。事務局設立、広報活動、研修活動、ロゴ作成、看板設置、イベント開催等積極、果敢であった。RECは、彼らの国づくりの応援者でありたいと思う。地域づくりにかける彼らの素直な気持ちの理解者でもありたいと考えている。

北の星座共和国 双子座館の利用促進のための商品開発

1. 全国における「ミニ独立国運動」による地域振興	8
2. 「北の星座共和国」とは？	9
3. 「北の星座共和国」の建国に向けて！	10
4. 各イベントの実施（北の天文字焼き・サンロードハネムーン etc. ）	11
5. ロゴマークの製作と利用方法（商標の登録・企業参画）	13
6. 双子座館の建設に至るまで！	14
7. 双子座館内の「北の星座共和国」コーナーの設置	17
8. 先進地の視察（室蘭・札幌・旭川 etc. ）	18
9. マーケティング会議の報告について	20
10. 商品の具現化	21
11. 専門業者との打ち合わせ	22
12. これからの商品開発の計画について	23
13. 「北の星座共和国」のさらなる広がりを求めて！	24
ま と め	26
北の星座共和国建設推進事務局活動の経過	27

1. 全国における「ミニ独立共和国運動」による地域振興

ここ20数年（1970年～92年）というもの、全国において地域づくりに積極的なまちづくりがいわゆる「ミニ独立国」を建国し、地域振興の糸口として我が町を創造していこうとする傾向が増加している。始まりはパロディとしての手法だったものが、憲章や政策などを決めて市町村の年間行事に組入れるなどその「まち」を活性化しようと活動している。行政主導型の独立国や商工会議所・商工会・農協などの地域指導団体主導型や、民間サークル主導型がある。さらに広域的に連係して「我がまち」の再発見や再認識をしようとしている「まち」が現れてきている。現在のところ全国で150ヶ国以上（北海道においては、40ヶ国以上）の独立国が存在するといわれているが、建国する国もあれば消滅してしまう（私たちは、「廃国」とか「閉国」とよんでいる）独立国もあるという。このように廃国してしまう大きな原因として考えられるのは、財政面の不足という一般的な問題や個人的奉仕の限界があるのではないであろうか。さらに、単なるマスコミ受けだけを狙った非継続短期PR型があるのは紛れもない事実であろう。

独立国運動の主な目的は、何であろうか。当然、一過性といわれているイベント開催的なものが一番多いであろう。合わせて観光客誘致のための運動が主な理由としてあげられるのではないであろうか。また、物産販売や特産品開発の手段としての活動や地域文化や歴史を再確認するための独立国もあるであろう。独立国を運営する主導団体や地域性の違いなどにより異なっているのである。地域の活性化やまちおこしには、色々な手法があるから、独立国運動のマニュアルというものはないであろうから、自らの創造と知恵で築き上げていかなければならない。さて、これらの独立国の中でわたしたちが興味を持った一つの「独立国」に佐賀県の「ペンタ共和国」がある。

この独立国は佐賀県内における五つの近隣町村が、行政を中心として広域的に手を結び地域振興を図ろうとしているのである。

「ペンタ」とは、ギリシャ語で五つという意味だそうだが、ネーミングからしても、こだわりを持ち反面遊び心も含まれた、非常にユニークなものである。

自治体というのは、わたしたちの目から見て市民や町民の手前、パロディっぽい政策というものを敬遠しがちであるが、この佐賀県の五つの市町村は真剣に計画を立て、見事に取り組みを実行している。共和国の国旗をつくり、キャラバン隊を繰り出して観光PRや物産販売、そして広域イベント（音楽祭、映画祭、コスモフェア）に力を入れている。わたしたちはこの独立国を参考に、自分たちの住む北・北海道を民間と行政・自治体が相互に情報を交換し、力を合わせて大きな「国」として地域住民や外側に向けてPRしていくことができないものかと思うのである。

このように、様々な「独立国」が存在するのであるが、取り分け北海道内の独立国は個性が強く、つわもの揃いである。

2. 『北の星座共和国』とは？

私たちが住む北・北海道の中で、観光地として取り上げられるのは、旭川～層雲峡、利尻・礼文～稚内周辺・・・この二ヶ所だけ、という大手旅行社の言葉の裏には、特異性が少なく確固たる産業に乏しい、過疎に苦しむ北・北海道の状況が、べったりと張り付いている。旭川市から“てっぺん共和国”の稚内市へ、国道40号線が内陸部を走り、日本海側を231号～232号、オホーツク海側を238号が北上し、これらに275号、239号、あるいは39号、333号などが結びついている。現在北・北海道のトライアングルゾーンは、上川支庁をはじめ、五つの支庁の行政エリアになっており、新聞の「〇〇版」があるとおり、隣町でも情報が届かない状況がある。

このような現状の中であって、一つの町や村が、わが町の個性を育み、産業を活性化させ、経済基盤を充実させることは、一つの星の輝きのように素晴らしいことに違いないと確信している。しかし、これらの一市町村単位の「点」から、隣町へとつなぐ「線」発想へ、さらに北・北海道全体という「面」の捉え方をすることにより、これまでともすると道北に集まらなかった全国の眼をひきつけ、北・北海道は「何もない所」、「寝て通る所」といわれた言葉をはねかえす現実を作り出すことになるであろう。

いわゆる、町おこし村おこしの機運が一つの町のみではなく、周辺町村、しいては北・北海道全域の連帯として、これまで行われてきた各地域の個性的な「まちおこし」の花火を“連発”で見せる広域的な工夫をしたら、もっと道北を売り込むことができ、それぞれの地域の活性化が図られると思うのである。この北・北海道には、本州を上回った、山・川・海・空・大地、そして星などの自然が存在し、恵みとして息づいている。

そして、豊かなこの自然と地域の既存産品や観光資源、各施設や公園、あるいはスポーツイベントを、北・北海道に住む私たちのごく自然な共通認識までに高め、『北の星座共和国』として、世界中に売り出したいものである。

サンピラー（太陽柱）の出現する名寄市は「太陽のまち」、サフォークランドの士別市は「牡羊座」、かに祭りの枝幸町は「かに座」、漁業のまち苫前市は「魚座」、南極犬のいた稚内市は「大犬座」、朱鞠内湖のある幌加内町は「水瓶座」、矢文湖や万里長城のある下川町は「射手座」、風連町は「山羊座」、歌登町は「牡牛座」、美深町は「双子座」、和寒町は和をとる星「月」など、既存の風習や産物、施設、人物、祭りなどを88の星座にたくし、北・北海道の連帯のキーワードとして、あるいはトータルイメージとして、自信をもってアピールできるのが、『北の星座共和国構想』である。

私たちは、この広域によるコンセプトを様々な所で紹介し広く活動をしているが、当然一年や二年では理解を得られるものではなく、月日をかけて啓発活動を続けていくつもりである。楽しい北・北海道を創りあげるために！

3. 『北の星座共和国』の建国に向けて！

平成元年六月に、構想を提起してから多くの方々にご意見をいただいた。

今までこの北・北海道にこのようなコンセプトは見られなかっただけに、大きな提案に驚きの声や首をかしげる人も現れ賛否両論いろいろな意見が寄せられたのである。しかし、広域的なテーマの設定というのは、非常に困難な発想であり作業でもある。これらにチャレンジした私たちは、この後様々な展開をしていくわけであるが、その中の主なものをかい摘んで記述したい。新聞にて発表後、この構想を実現していくために、北・北海道の44の市町村で活躍されている「まちおこし」のメンバーや自治体の方々に構想説明の会議案内を出した。さらに、年に一度、開催会場を変えて「北・北海道連絡会議」とし、後段のシンポジウムを『北・北海道広域圏活性化サミット（スタンザム）』という名のもとに開催することにした。第1回の開催会場を名寄市に設け地元の人達にご協力をいただいた。220名の方々が参集して、多くの人的ネットワークができた。そのシンポジウムの際のテーマは、「広域的まちおこし」ということで事例発表を通じて開催されたのである。

平成2年は士別市で開催し、テーマは「企業C. I. と地域C. I.」、平成3年は美深町にて「まちおこしと物流」、平成4年は和寒町にて「情報をいかした地域づくり」、という具合に4年続いているのである。特に4回目の和寒町のスタンザムには、横路知事のご参加もいただき意義深いシンポジウムとなった。また、後述することになるが名寄市における「北の天文字焼き」や道路を生かして線的につないだ「サンロード・ハネムーン」・「サンロード・バレンタイン」、旭川大学の学生による「天文字リレーマラソン」、母なる川「天塩川」を生かした「天の川下り」などイカダやカヌーのイベントなど広域的なイベントも開催されるようになった。メディアでは、テレビ局や新聞などで頻繁に紹介されるようになり、北海道民の脳裏に少しずつ焼きつけることが出来るようになったのである。（北の星座共和国の活動については、経過説明の資料を参考）

また、将来的にはこの「共和国」を建国して、北・北海道のブランドとして確立していかなければならないのであるが、それよりも大切なことは、建国のみが目的ではなく建国へ向けてのプロセスそのものが重要であることを仲間にも理解をいただき、焦らず時間をかけて取り組んでいきたいものである。

私たちの活動方針として、①遊星人ネットワークづくり、②地域情報の収集と発信、③各地域での商品開発、④年間スポンサーの募集、⑤観光ネットワークの取り組み、⑥インフォメーション体制の確立、⑦住民活動などをあげている。

この全てを一度に実現することは出来ないが、一步一步地道に活動して多くの人達に理解を頂きたいもの思う。必ずや近い将来の、『北の星座共和国の建国』を願って・・・！

4. 各イベントの実施

— 1. 「北の天文字焼き」の実施 —

『北の星座共和国』の第一の根拠になる不思議な「天」の文字が、「北の天文字焼き」のきっかけである。道北の十四市町村に、ギリシャ神話やカルディア伝説等に出てくる十二の「星座」や太陽、月を当てはめ、これらの各地を結んだ時に「天」という文字が浮かびあがってくる。

観光面で大幅に遅れている道北の大自然を見つめ直し、各市町村で今努力している観光事業や一村一品を「星座」を使ってトータルイメージを作る格好の発見である。

この考えに共感し、「京都に大文字があれば、われこそは北の天文字なり」とこれをイベントにしようとするグループ「助っ人」に出会うことになった。

1989年、彼らは天文字焼き実行委員会を結成し以下の趣意書をもって実行したのである。

『趣意書』

【日本のめざましい発展をとげている現状と将来を見る時、北海道、特に私たちの住む道北地方は明るく希望に満ちた展望を見ることができるといって、残念ながら皆無といっても過言でない現状であろうと思われます。「中略」新しい時代の幕開け、平成元年を記念すべきイベント年として、はまなす国体デモンストレーションの後援事業および名寄樹氷祭りの一環として第一回「北の天文字焼き」の実施を決意致しました。日本で一番寒い時、日本で一番寒い「まち」からロマンと感動を全国に発進致します。】

この火文字は、縦二百メートル、横百二十メートルで、京都の大文字をしのぐ日本一の火文字を展開する。太陽の丘の下、準備は、火皿となる二分の一に切断されたドラム缶二百七十個を丘の上に運びあげることから始まる。次に深さ70センチメートルにもなる雪の中、文字をセッティングしなければならぬ。市街の中心にきちんと文字を向けるのが腕の見せ所で、観客席（市街）と丘の上との熱い交信が舞台を作り上げて行く。

「天」の文字に並べられたドラム缶にぼろ布を詰め、灯油をかけて点火されると一個一個の炎が（隣の町と隣の町が、手をつないで行くが如く）連なり、大きな「天」の火文字が夜空に浮かび上がるのである。まさに、『北の星座共和国』におけるネットワークの象徴となるイベントである。

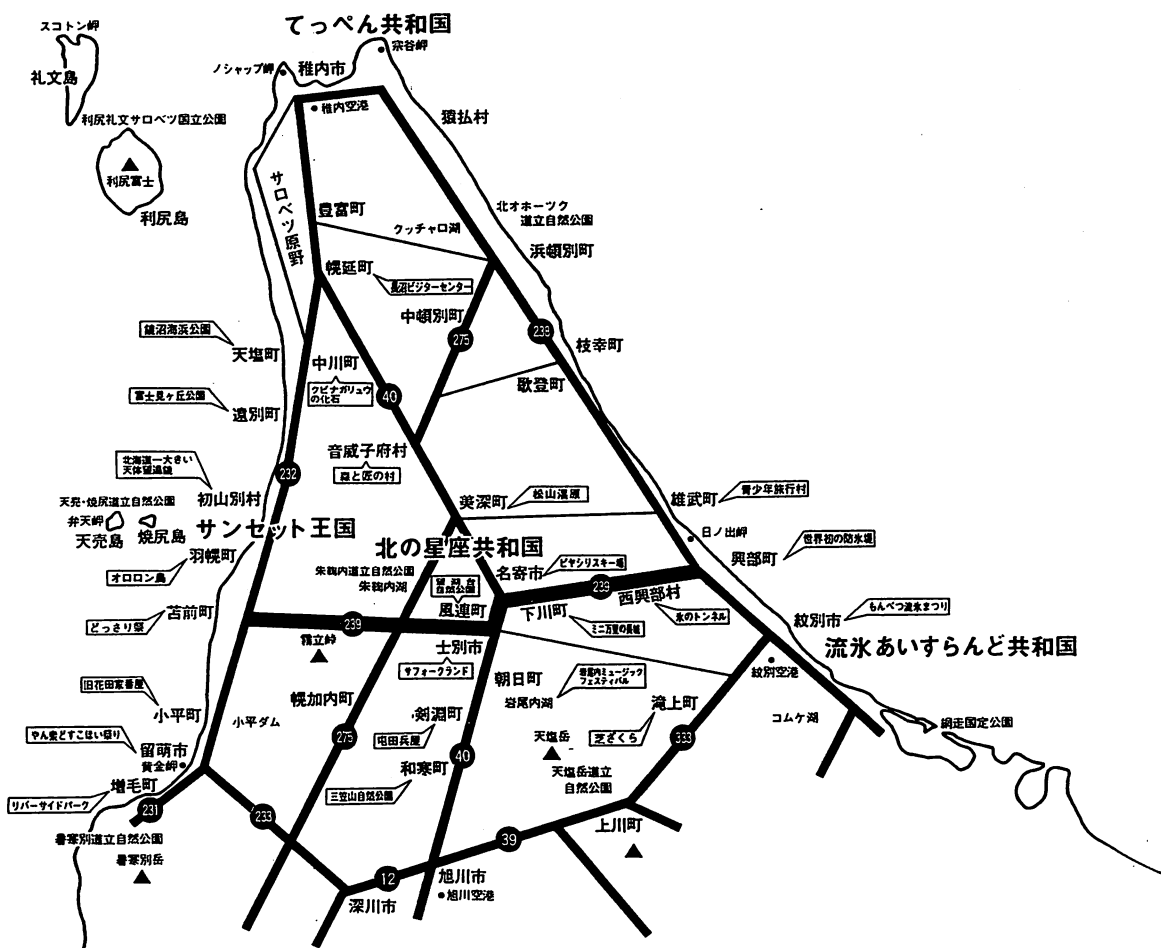
— 2. サンロードハネムーン —

「サンロード・ハネムーン」とは、羽幌町のサンセット王国が1989年から始めた洋上結婚式、「サンセット・ウエディング」が、私たち（北の遊星人たち）の構想とドッキング。オホーツク海の雄武町にある日の出岬を出発点に、太陽が西へ移動するように全国から応募した三組のカップルを十一市町村を経由して、日本海の羽幌町へ、そして船上へと導いていく企画へと大きく発展したものである。

サンセット・ウエディングは、初夏の天売・焼尻観光を盛り上げるために企画され、離島航路の新造船フェリー「オロロン丸」（450トン）の船上で、羽幌町長の媒酌で挙式し、翌日の焼尻島のめんよう祭り、天売島の水産祭りに参加してもらうスケジュールとなっている。このサンセット・ウエディングを企画実行するサンセット王国実行委員会が、道北の広域まちおこしを提唱する私たちの思考に共鳴、オホーツク海の日の出岬と日本海を結ぶルートへと拡大することになったのである。言葉を代えて言うならば、羽幌町で行っている「サンセット」だけでなく「サンライズ」（日の出岬）、「太陽のまち」

(名寄市)を結びつけ、道北を横断している国道239号線にニックネームとして、太陽の道「サンロード」と名づけて大きく情報を発信させようとしたものである。

行政レベルでも、数年前から留萌支庁や網走支庁では、オロロンライン、オホーツクラインの海岸線と内陸部を結んだ観光開発の必要性を論じてきたようであるが、具体的に何をもって結びつけるかという点で、一步突っ込んだ論議が成されなかったという。しかし、1990年3月5日に下川町商工会館で開かれた「サンロード・ハネムーン準備会議」の席上、雄武町、下川町、名寄市、美深町、幌加内町、羽幌町などの商工会青年部、役場関係者始め、道北観光連盟、各地のまちおこしグループが一堂に会して、自分のまちの将来的展望に立って、雄武町のサンライズと羽幌町のサンセット王国を支援することが必要との点で意見の一致を見て実現する運びとなったのである。



5. ロゴマークの作成・利用方法（商標登録・企業参画）

『北の星座共和国』建国のための啓発運動を続けている内に、わたしたちは多くの出会いをすることになるのであるが、ここで多くの方にこの「北の星座共和国」には、シンボライズされた一つのトレードマークが必要ではないかと助言を受けた。広域な活動に象徴的な「シンボル」を創り上げることは非常に困難なことであるが、ステップを踏んでいくには英断を決意しなければならない。北・北海道にある全ての市町村のコンセンサスを取るということは、何十年経過しても不可能であろう。従って、見切り発車的に進めていくことにしたのである。わたしたちの活動する『北の星座共和国』の範囲は、留萌・旭川・紋別・稚内の四つの自治体を結んだトライアングルゾーンというイメージアピールを取っているのであるが、このゾーンだけで44市町村が含まれると考えられる。行政区域でいくと、上川支庁・留萌支庁・宗谷支庁・網走支庁・空知支庁の五つの支庁がこの中に入っているのである。ロゴマークの製作にあたっては、札幌に在住する友人がデザイナーをしている関係で、この役割をお願いしマーク製作を開始して頂いた。

このロゴマークの意味は、遊星人や遊星法人がめざす北の十字星（北・北海道の象徴として、ノーザンクロスと呼称する）と考える。44の市町村とプラス1（どこでも、だれでも加入の可能性がある大きな1）が45という単位で交流し、星座が見える豊かな生活と環境の創造を活動の理想とする……という感覚で作りに上げられている。

わたしたちは、このマークを使って最初に自らの名刺を作成した。表側にマークと名前・住所・役職などを掲載する。裏側には、「遊星人十ヶ条」をうたった遊星人の資格条件（一つでも該当していれば良い）なるものをパロディっぽく記載した。

次にこのロゴマークをオリジナルの封筒や便箋に使用して、各地域で頑張っている遊星人に配付した。白地（パールホワイト）に金色をデザインしたものであるが、仲間たちの評判は仲々良かった。今後、事務局からの案内や報告はこの封筒にて発送されることになるのである。45のマークはどちらかといえば、玄人受けするものでないかと考えられるが、メルヘンチックな「星座」のイメージからすると、もう少し可愛らしいロゴマークを作ろうということで、「北の星座共和国」の文字一つ一つに「星」をちりばめてみた。

このロゴマークはこれから考え出されるあらゆる商品に使用されることになるだろう。さて、ダスキンという大手企業が全国に営業店を構えているが、この企業が私どもの活動に興味を示し、各事業所や店舗にリースしている玄関マットにこのロゴマークを掲載していくことになった。それも、「北の星座共和国」の星をちりばめたロゴマークを頭に使用し「天の川」のカットを入れ、各市町村ごとに星座と地域の特徴を出してPRしていこうというものである。現在の所、3町（双子座の美深町、月の和寒町、射手座の下川町）の図柄ができあがっているが、今後も市町村数を増やしていくという。

私どもの活動に大変励みになり、相乗効果で大いにPRしていくことができる。

6. 双子座館の建設に至るまで

以上のように、従来の「道北」と呼称することを止め、その代わりに「北・北海道」と呼ぼう、また「北・北海道」のトータルイメージ・代名詞として、“星座”をテーマに、運命共同体としての各市町村がお互いの町の良さをPRし合い、相乗効果を高めようという運動が始まった。この運動に賛同してくれる一人一人を「北の遊星人」と呼び、トータルで「北の遊星人たち」と名乗った。

賛同者は発表当時の14市町村の枠を越えて広がっていった。遊び心でのスタートは不安であったが、理解し協力してくれる仲間たちがこんなにも多くいたのかと驚かされたり、また心強くも感じたものである。太陽や月、そして星座にちなんだ色々な産物やグルメ等が誕生してきた。その一例を紹介してみたい。例えば、太陽のまち・名寄市では、サンピラーラーメン（三平食堂）、太陽鍋（炉ばた）サンシャイングラタン（ヒビンカ）、珍菓「北の天文字焼き」（千虎菓子店）、サンピラー汁“三平汁”（ドライブイン40号）、ワンカップのお酒（北の天文字焼きのデザイン）など多数生まれている。また、室内ゴルフ場に、太陽のまちにちなんで「サンショットクルー」という名称をつける企業も出てきた。下川町では、地場産業の炭焼きコーヒー“スターアロー”（喫茶アポロ）、射手座のてんぷら“もんじろう”（門車）、ワンカップのお酒（万里の長城のデザイン）、射手座の手延べ麺など。美深町では、双子座のやまめ釜飯（久の家）、双子座のパン（川岡菓子店）、地場産のイモ“インカの星”（大塚商会）など。

その他、中川町、和寒町や他の市町村にもグルメが登場し、その後も色々な方面から企画が持ちかけられるまでになってきた。こうした話題づくりは、私たちの運動にとって大変強力な味方となり、大々的に新聞・テレビ等で報道されたりしたが、いくら美味しいものであっても、時が経つに係らず売り上げが落ちないというようにするのは大変難しいことである。継続的な効果を上げるにはやはり北・北海道以外から多くの人々に来訪してもらい味わってもらうようになることが必要と考え、持ちかけられた新企画に対して、発表時期を延期しようということが多くなった。

こうして、民間ソフト的な取り組みを一段落させて、ハード的な取り組みに力を入れるように行動形態を変えていくことになるのである。しかし、ハードなものに『北の星座共和国』構想を入れてもらうのは、非常に難しいものである。産物やグルメであれば、生産者や、店主・社長などの個人がこの構想を理解してくれれば、スムーズに事が進むことは多いが、建造物を含むいわゆるハードなものは、行政・自治体が関わっている部分が多く、企画や地域振興あるいは観光・建設などの担当者の理解が個々に得られたとしても、組織としての層が厚く、また特に行政上層の方々の理解がなければ下位職員が動きづらいうこともあり、構想導入決定に相当な時間と労力、そして根気があるものだとすることを痛感させられたのである。

しかし、構想3年、活動開始5年間の地道な活動を評価してくれる方々が「北・北海道」のみならず本州方面にまで年々増えてきたのが実感できるまでになってきた。一つ一つが印象深い、「双子座館」建設に至るまでの主な関連建造物や関連事業を以下に列挙してみたい。

<1. トイレ「北極星」（音威子府村）>

まず、音威子府村の交通の要衝地にレストラン「チニタ・オトイネップ」（チニタとはアイヌ語で“夢”のこと）が建設されることになった。ここに併設された“日本一きれいなトイレ”のニッ

クネームとして、「北極星」という星座に関連した名称をつけていただいたのである。

〈2. 「ふるさと交流館」(下川町)〉

次に、下川町で万里の長城のある桜ヶ丘公園にふるさと創生資金を含む5億5千万をかけて「ふるさと交流館」が建てられることになった。決定した建築設計家が、偶然この2年前道庁職員と共に下川町を来訪し万里の長城を見ていただき、下川町が「北の星座共和国」構想の中で“射手座のまち”になっているということを知っていたためか、そのイメージに相応しく、宇宙に向かって今まさに飛び立とうとしているロケット(矢)のような形と思えるような設計となっていたのである。私たちは、この著名な設計家との不思議な出会いやつながりに運命的なものを感じ、完成前から機会ある毎に、PRに努めることとなったのである。

〈3. サンピラー「光のモニュメント」など(名寄市)〉

名寄市は太陽のまちと呼んでいるが、その根拠は冬のダイヤモンドダストに太陽光が反射してできる「サンピラー(太陽柱)現象」が出る名寄ピヤシリスキー場があること。(私たちはこの、スキー場を道外の若者向けに、「サンピラーバレー」というサブタイトルをつけて呼んでいる。)また、単位面積日本一のひまわり畑(ひまわりは英語でサンフラワーという。)があるということ。太陽にちなんだ地名が多いこと。さらに市立木原天文台は東亜天文学会でも認定されている「黒点観測日数日本一」の記録を持った天文台であること……などをその理由としている。

このまちの「名よせ通り」に太陽柱(サンピラー)をシンボライズした照明塔として「光のモニュメント」建造してくれたのである。二塔建てられ、毎日夕方から夜10時過ぎまで点滅し、商店街を幻想的な雰囲気包んでいる。また、平成4年には、浅江島公園の一角に、歩くスキーなどの人達が使用できる「サンピラー館」と呼ばれる建造物が建てられるようになった。(札幌方面のスキー場では、道外向けに、マスコミを使ってダイヤモンドダストやサンピラーを売り込むところも出てきているとの事であり、私たちは関係者の理解をさらにいただく中で「北・北海道」こそこれらの自然現象が見られる本場なのだとすることを大々的にPRしていく必要があると考える。)

〈4. 「羊飼いの家」など(士別市)〉

士別市はサフォークランド士別として、まちおこしで全道でも先駆的なまちである。「サフォーク研究会」との当初からの連携の中で、『北の星座共和国』構想において士別市はまさに「牡羊座」のまちであって欲しいという願いを込めて、こうしたハード事業が徐々にでき上がっていることに、深く敬意を表するものである。

今後も「世界めん羊館」構想も実現する方向との事であり、より一層のネットワークづくりをしたいものである。

〈5. 物産展示館「双子座館」(美深町)〉

さて、美深町を双子座のまちと名付けたのは、この町の二大観光資源とも言える日本最北の高層湿原“松山湿原”と、温泉がありチョーザメでも有名な“美深アイランド・森林公園”が甲乙つけられない、まさに「双子座の兄弟」に思えたからだった。

遊び心・パロディとは言え、私たちのこうした「こだわり」(こじつけとも言える)が地域のかたがたに理解されるだろうかと非常に不安であった。構想発表後、稚内土木現業所が、旧美幸線のトンネルを拡幅して、美深町と歌登町の境に「天の川トンネル」という名称のトンネルを建設する

という情報が入ってきた。古くからこの地域には「七夕伝説」が実際にあったということで、トンネルの前後に、織姫橋と牽牛橋という名の橋まで作るのだという。（しかも、牽牛橋は、「牡牛座」のまち・歌登町の方に偶然にも建設中という。）こんな話があったり双子座のまちに相応しく、美深町の東西に高さが1メートルしか違わない「美深峠」が2つあることが分かったり……ということで、徐々に広がりが出ていったのである。

まず、森林公園沿いのミルキーウェイ（国道40号）のパーキングに、アラスカ産の大木を設置し、2羽のフクロウの彫刻が施されることになった。このフクロウの名称が、美深の遊星人たちのアイディアで双子座の2つの星の名前を採って「カストル」「ポルクス」と名付けられたのである。次に、同公園内に2つのコテージが建設されたが、そこにもこの2つの星の名が付いた。このコテージは温泉が引かれており、1棟につき1泊で1万3千円（6人用だが、何人で使用してもよい）ということもあり、近郊の市町村や観光客にも大好評とのこと。将来建つであろうコテージも、2つずつ並んで建てられ、より双子座館の町に相応しい風景が出現することになるのかもしれない。このような中で、平成4年7月に美深町内の物産館「双子座館」の解説につながって行くのである。しかし、私たち「北の遊星人たち」（『北の星座共和国』建国推進事務局のメンバー）は、この物産館の名称が正式に決定するまでは、ほとんど知らなかったのである。上級官庁との交渉、町民・議会への対応などもあるため、ある時点まで深く静かに企画を進める必要があったのであろう。

とかく「我が町と名付けられた星座の名前との関連が不明確で、理解ができない」と言われることも少なくなっただけに、「2つの地点が双子座の兄弟である」という位の（今、考えても赤面しそうな）不明確な理由付けだけで、この構想を組み入れて頂き、企画を進めてくれた役場の若い職員の方々の努力と、それを支えて形にしてくれた上司や議会関係者、そして町民の方々に深く感謝しているところなのです。

<6. これからのハード構想>

朝日町では、「サンライズホール」の建設を進めているところであるが、この中にも私たちが天秤座のまち・朝日町には「ピラミッド」が似合うのではという夢を語った部分に答えて頂き、ホールの屋根の部分に「ピラミッド」風のサンルーフが設計されているのである。朝日町の遊星人の働きかけに答えてくれた関係者に感謝したい。

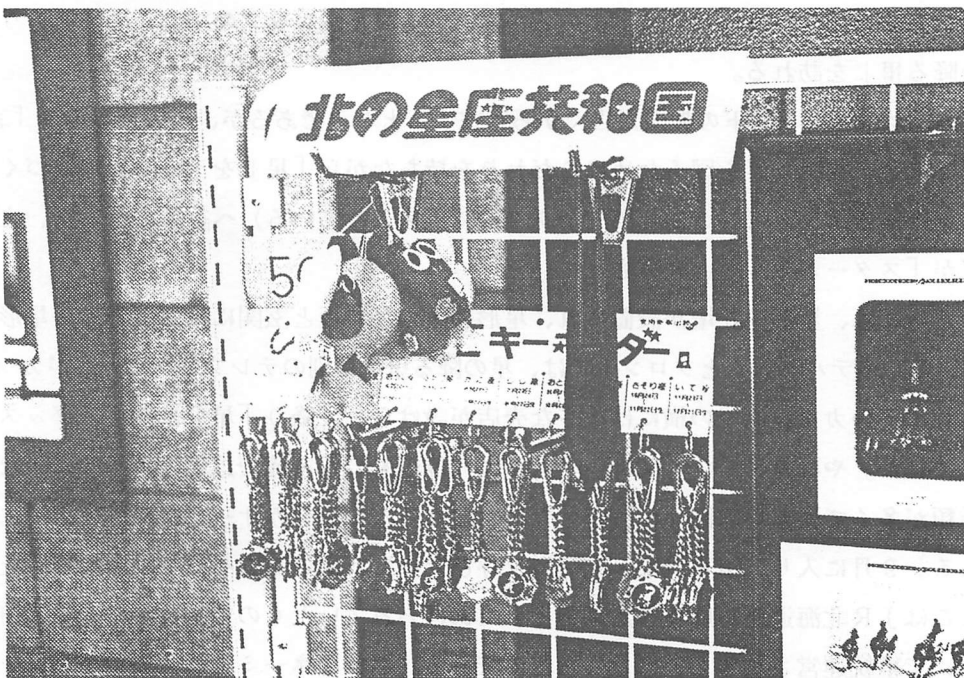
前述した美深町の「双子座館」の場合、国や道などの上級官庁には企画当初から名称として「双子座館」という仮称をつけて企画し、事業が認められたとのことであり、今後の自治体関係者が同様の企画を立案される場合の前例となると言われているようである。共和国内の各地に「○○座館」「□□座館」（ニックネームでもよいのであるが……）というものが建設され、この北・北海道に来訪する人たちが、自分の誕生星座のまちを含め、各星座のまちを訪れた際に、こうした建物があることは、舞台演出上大変重要になると考える。今後建設が予定されている各市町村の建造物に、広域圏構想である“星座”をテーマとした『北の星座共和国』構想を取り入れて頂くことが出来るよう熱望し、一層運動を進めて行かなければならないと考える。

7. 双子座館内の『北の星座共和国』コーナーの設置

こうして、ミルキーウェイ（国道40号）沿いに、イタリア人建築設計家によるオリジナルな建造物が建てられることになった。運営は第三セクター(株)アウル（“ふくろう”のこと）が行うこととなり、この会社の方々の理解が得られ、館内に『北の星座共和国』の星座グッズコーナーを設けて頂けることになった。開館に合わせ、近隣の市町村に出向き、物産の展示や販売等を依頼したとの事で、オープンと同時に館内はものであふれ、また夏から秋の観光シーズンには、大型バスが何台も駐停車して盛況となった。

星座グッズも増え、「双子座館」という星座にちなんだ雰囲気伝わってくるコーナー作りをして頂いていることから、今後一層各メディアへ私たちからも紹介しPRを強めて行こうと考えている。ところで星座グッズを開発するにしても、勉強不足は否めず、資金不足も頭のいたい問題であった。会費を集めて運営する形態を取らず（スタンザムなどの事業をする度に行政や民間からご協力を頂いているが…）講演などを依頼された時のお金などを持ち寄って運営しており、実体はほとんど各人のポケットマネーで活動してきたと言っても過言ではないのである。事務局自体の運営は、北・北海道45（44+1）の5支庁に亘る広域を対象に活性化活動をしているだけに、支援しづらい形になっているのである。こうした資金確保が話題になっていた時、REC北海道環境文化研究センターがまちづくりグループへの研究助成金制度を設けたことを知り、応募して平成4年度の助成対象として決定して頂いたことは、本当に有り難い事であった。

北の星座共和国「グッズコーナー」



8. 先進地の視察

今回の研究に当たって、私たちは情報収集を図るために、管外への視察研修に重点をおいた。最初に、登別の「伊達時代村」を訪れた。

ここは直営店が多いようであるが、非常に多種多様に品物が置いてあり、子供たちからお年寄り用のお土産まで幅広く販売されていた。お店の方に色々と尋ねてきたのであるが、その中で興味を持ったのは、①一番売れる品物は、饅頭類である。②千円前後の品物である。③家庭で遊ぶことのできるもの。④大きい物は喜ばれない。⑤品物に観光地の名前が入っている。……など、時代の潮流の中で色々と変化はあるものの、おおよそこの位のこと表れている。

この伊達時代村は、北海道には珍しい「テーマパーク」であるが、近くには登別温泉やマリノパークがあり、観光地に必要な短時間に次の場所へ移動できるという点では、条件が大変揃っているように思われる。登別の後に、室蘭を訪れた。

ここは、重厚長大産業の栄えた鉄鋼の「まち」であるが、今は厳しい環境に置かれ、合理化や縮小、あるいは合併などにより人口の減少も余儀なくされた所である。

しかし、鉄鋼の企業もあらゆる事業分野に手を指し入れたり、サービス産業に力を注いだり、新しい挑戦を試みている。私たちが訪れた、フラワーショップとファンシーグッズショップは現代風の建物の中に若い人向けする品物がふんだんに置かれていた。

ここでは、部屋をグレードアップさせるための「置きもの」に力を入れ、ガラス工芸やカップ類、そしてポストカード用の小さな額や飾り用のローソク類を販売していた。フラワーショップは、別のウィンドーであるが互いに相乗効果を持って売り上げを伸ばしているようである。

興味を惹かれたのは、このグッズショップの中でお風呂用の品物がたくさん置かれていたことであるが、若い人たちにとって、お風呂に入っているひとときもファッションの一つなのであろう。翌日、芦別の「星の降る里」を訪れる。

ここは、芦別レジャーランドの施設が古くから存在するところであるが、市民ぐるみの「まちおこし」として芦別のイメージアップを図るためにこだわりを持ちながら「星」をテーマに地域づくりを実行している。市内にあるホテル（ここは、第三セクターで経営されている）へ行ってみると、まずホテルのネーミングが「スターホテル」と呼称されていた。

ホテルの入口には、星形の花壇が設置され、星形の大きな看板と玄関にはこだわりの星形玄関マットが敷かれていた。ホテルに入るとフロントでは、星の降る里・芦別のテレフォンカードがカウンターいっばいに置かれ、そのカウンターの横には小さな売店が設けられて降り「星」に関するグッズがいろいろと並べられていた。やはりここでも600円から1,200円位のものが主流で以外と菓子類は少なかった。

売店も種類が多くて楽しい雰囲気作りをしなければならないというオーナーの思考が手に取る様にわかるのである。9月に入り、道東（東・北海道と呼びたい）にある第三セクター「ふるさと銀河線」を訪れた。ここはJR北海道から廃止予定路線としてあげられていたものであるが、近隣市町村が協議会を設け民活にて継続運営されることになったものである。路線のネーミングについては、一般公募して決定したものだそうだが、やはり夢のある名前ということで、この「ふるさと銀河線」が選定されたそうである。私たちの北・北海道における活動についても知っていたらしく、お互いに頑張りましょうと

励まされてきた。北見に第三セクターの本部が置かれており、それぞれのまちで個性を出しながら運営がされていた。グッズは、それほど多くはないがキーホルダーや鉄道記念のレールグッズなどが売られている。

この路線では、色々なイベントが行われ売り上げの向上に非常に苦労していた。北海道内でも北部と東部の相乗的（ネットワーク）な仕掛けも必要になってくるとつくづく感じたものである。

札幌市内の視察は、専門店を中心に行ってみた。北海道内に15店舗を営業しているファンシーグッズ専門店では、2,000種類ものアイテムを持ち、その地域の雰囲気や環境など、そして建物に合わせてコーディネートして販売されている。

その中で札幌駅東口の店舗では、皮製品の売れ行きが大変に高いそうである。また、パロディグッズというのは、その時代の流行（テレビで人気がある）があるそうで、同じ品物については長い期間に渡って売ることがないと店員さんは答えてくれた。このファンシーグッズ専門店の顧客年齢は18歳を中心として、13歳から25歳までの範囲を狙って店舗拡大がされていた。また、札幌駅前にあるお土産店では、観光客相手のお店でどうしてもシーズンによって商品の売れ行きに大きな違いがあるそうである。当然、夏季（6月～9月）の観光シーズンが1年間の内、大きなウエイトを占めるそうであるが、閑散期の売り上げを向上することには札幌でも大変な努力があることを知った。

登別「伊達時代村」



9. マーケティング会議の報告について

これから私たちは、この北・北海道地域のグレードアップを図るために様々な商品を提案し、あるいは事務局の運営のために自分たち自ら販売を行っていかねばならない訳である。それに先立って数名の遊星人たちでマーケティングの会議を開催した。

当然、だれが担当して商品の製作を行うのか、またどのようなお店に商品を置いてもらうのか、流通をどのように行えば良いのか、商品管理を誰が責任を持つのかなどと、多くの課題について議論を交わした。特に上川北部の地域性の中で果して「北の星座共和国」のグッズを受け入れてくれるところがあるのであろうか。ある意味では大変未知な地域なのである。

メジャーな観光地ではないだけに、綿密な計画と地道な営業努力が必要になってくるであろう。旭川以北の市町村は、この旭川を経済の中心としてひとつの圏域的広がりを見せている。しかし、1次産業である農業・林業・水産業の衰退などにより人口の減少はとどまるところを知らない。そんな中で新しい提案は、非常に革新的である一方地域住民には受け入れづらい面もある。

しかし、今この計画をなくしてしまうと将来的に大きな後悔が残るであろう。そのようなことで全員の見解の一致が見られ、事業を進めることにしたのである。ここで地域に根ざした温泉郷を考えてみると、現在、上川北部だけを例にとっても10ヶ市町村に9つの温泉が営業を展開している。

自治体が経営参画して、公社を設立しているところや、第3セクターにより運営されているところ、民間企業の多角経営により営業されているところなど、人口の少ない地域であるにもかかわらず非常に努力されている。私たちは、まず初めにこの温泉宿を中心に販売網を広げる計画を立ててみた。入り込み客の多い温泉では、年間7万人もの人達が出入りするという。また、宿泊客も一万人を越える所があるという。

このような地域に密着したところにグッズ販売を依頼しそれぞれの「まち」のPRと『北の星座共和国』の啓発運動に活路を見いだそうということになった。そして、前述したが、美深町に完成した「双子座館」には、『北の星座共和国コーナー』を設けて、この運動にこだわった営業を展開することにした。また、イベントなどにも積極的に参加して、商品化されたグッズを大々的にPRし、販売の拡大を広げて行こうということになったのである。それぞれの人々が、自分たちのビジネスを持った異業種の集合体であるが、地域を愛し社会への貢献を考える時、新たな喜びを感じることになる。

10. 商品の具現化

商品を開発するという事は、大変な発想と創造力を必要とする。私たちは、まず市場に出ている既存の商品に的を絞ってスタートすることにした。

星座関係グッズが、かなりの種類で商品化されているが、大手デパートやグッズ専門店のある都市部を除いた地域ではそれほど店頭に置かれていないのが事実である。私たちのコンセプトである『北の星座共和国』をできるだけ全面に打ち出して、既製品から展開することにした。星座の下敷き・星座のしおり・コースター・キーホルダー・グラス・スプーンセット・テッシュペーパー・トラベルセットなど低価格で気軽に購入できる星座関連の物を選び販売を計画した。

続いて少しづつ手を加えて『北の星座共和国』のロゴマーク（前述している）を使用して星座のタオルや、目玉商品としてのオリジナルグッズ「星座のお守り石」を製作してみたのである。これは、現代の若者が必ずと言っていい程、星座占いに懲って新聞や雑誌、或いは星占いの専門書に目を通すのである。

神話の世界に存在する人物や動物、或いは、身近なものの形が自分のイメージと重なり合ってきて、「星座物語」なるものにロマンを求め、現実には輝く星々に夢を託すようになる。これは、太陽が1年掛かって恒星の間を通り抜けるように見える道が「黄道」と称され、その黄道上にある12の星座が一般的な星占いに使用されているが、このようなロマンを通して人生の“楽しさ”のきっかけが作られているのは、紛れもない事実であると確信している。このロマンを題材に、お守り石をセットにしてみた。

12種類のブラジル産の石を使用して、それぞれの星座に「石ことば」を当てはめてみた、例えば「双子座」には、「アゲーテ」の石を使い、「石ことば」は、「勝利・楽しい夢」とした。消費者は、差別化された商品を望むものであると多くの方から学んだのであるが、これは、自分の誕生日がそれぞれ違うことで、商品の種類も変わってくる。自分だけがこの「お守り石」を持っているかのような錯覚をするのである。

次に「双子座館」のシンボルキャラクターである双子のふくろうをあしらった人形にチャレンジすることにした。雄と雌のつがいのふくろうをイメージして、雄を「ポルックス君」、雌を「カストルちゃん」と名付けメルヘンチックに表現してみた。おもちゃ専門店で売られている単価よりも低価格にして、購入し易いものとした。商品の汚れを防ぐために、一個一個袋詰めをして東京ディズニーランドで売られているという袋とじ方法を使用して、双子座館のキャラクター商品として発表しようとしている。

続いてポピュラー商品として『北の星座共和国』の「オリジナルテレホンカード」を製作することになった。札幌の友人に私たちの運動の主旨を説明して、デザインをお願いすることにした。このテレカには、前述した45市町村（ノーザンクロス）のマークを取り入れ、地球の図柄を中心に置き、北・北海道からの情報発信を表したのである。地球環境保護運動を全面に打ち出し、「あなたに見える地球はきれいですか」という呼びかけをコピーにして、作り上げたのである。また、その益金の一部を「緑の地球防衛基金」に寄付することを消費者に説明し、販売することとした。全体に宇宙的イメージで、自分たちにとっては、満足のいく商品ができたと思っている。

11. 専門業者との打ち合わせ

これらの商品を選定していく時に、やはりプロの方たにのアドバイスが必要になってくる。現代の流行に見合っているかどうか、お土産として渡した時にその人が喜んでくれるか、品物の大きさは適正か、単価設定はマッチしているか、この地域に相応しい物か……などと、かなり詳細に打合せをしていかなければならない。

私たちは、今までの地域づくりで培われた人脈やビジネスにおけるつきあいを通して、色々な専門業者を知ることができたし、紹介もしてもらった。その恵まれた、ネットワークの中にグッズに関するプロがいて、一つ一つ商品ができ上がっていったのである。デザイナー、コピーライター、コンサルタント、インテリアコーディネーター、生産業者、卸業者、宝石店、貿易商社……などなど、大勢の人達から、ノウハウを提供して頂いた。しかるに、一つ一つ形になって行ったのである。協力頂いた方たちに感謝を申し上げ、今後もさらにアドバイスをお願い申し上げる次第である。

12. これからの商品開発の計画について

「双子座館」という特産館に星座グッズコーナーが出来た事、これをきっかけとして他の市町村とも話が進みつつあることから、しばらく休止していた産品やグルメなど民間ソフト的な分野の取り組みを再開することになった。

今後に発表が予定されている商品を若干紹介したい。

〈1. 「あなたが星☆い☆」(名寄市)〉

これは、星形のかまぼこ薫製(かまくん)で、表面に12星座の絵が彫り込んであるもので、「あなたがスター」とも「あなたが欲しい」とも読めるもの。

将来、バレンタインデーやホワイトデー、また誕生プレゼントなどに人気が出ると予想されている。

〈2. 「熊笹バランス茶」(朝日町)〉

天秤座のまち・朝日町で採取した熊笹を使ったお茶が建国推進事務局と、朝日支部の共同企画で発表される。またお茶だけでなく他の商品も順次企画されている。

〈3. 液体状洗剤(旭川市)〉

北極星のまち・旭川市の洗剤製造会社(廃油を再利用し、環境に良い洗剤を作っていくことで全国的に有名な企業)が、現在液体状の洗剤を試作中であり、これに『北の星座共和国』構想を組み入れた名称をつけ新発売することになっている。

〈4. 「北の星座温泉めぐり」の温泉の素や「絵はがき」〉

12の星座や太陽・月・その他の星座のまちを含めて、各市町村のまちの温泉を素材に「北の星座温泉めぐり」や「絵はがき」を製作するというものである。

13. 『北の星座共和国』のさらなる広がり求めて

最近、嬉しい話題が事務局に寄せられ、また新聞でも大きく報道された。『北の星座共和国』のシンポイベントとして平成元年より4回実施されてきた「北の天文字焼き」が北海道、NHK、北海道新聞社が共催した「北海道まちづくり100選」において、特別賞に決定したというのである。この100選は道民が選んだ個性豊かで優れたまちづくりの事例515の中から、道民投票で平成4年11月に決めたもの、さらにこの中から平成5年1月、審査委員会の選考で各賞としては、「大賞」が5つ。また、部門賞として「快適なまちなみづくり」、「ふるさとの魅力の発掘」、「まちおこし・むらおこし」の3部門で各5つずつ。そして特別賞として「北の天文字焼き」他4つが選定されたのである。（資料参照）受賞事例の25はどちらかというと、ハードもののまちづくりが多い中、手作りのものとして評価が受けられたというのは非常に意義があると思う。実行委員会の皆様、またこれを最初に行った「まちおこし集団「助っ人」」の皆さん、土地を無料提供して下さっている鈴木牧場のご家族の皆様、また使い捨ての布切れの提供をしてくれている名寄市民の方々や市役所、自衛隊、JR、NTT、北電などの企業は勿論、個人的にもご理解ご支援して頂いている方々に、心から敬意を表したいと考える。

平成5年2月13日（土）午後7時点火。晴天のもと、第5回が大成功裡に終了したが、こうした受賞により、第6回目以降、全道・全国に向けて「北・北海道」の各イベントやスキー場、自然現象などをまとめて、キャラバン隊を組むなどPRが活動を行おうという気運が生まれてきているのである。

さて、『北の星座共和国』建国推進事務局の活動は、大手企業との関連にもはずみがついてきている。例えば、「ダスキン」が建国推進事務局との共同企画により「双子座館」を初めとして美深町役場や駅などの公的施設や店舗の玄関マットを製作してくれた。大変好評で、下川町・和寒町のマットも完成し各町内で利用されている。「足元からのPR」の効果は大きいので、引き続き他の市町村用のものが企画されることになりそう。また、NTTもテレホンカードの中で『北の星座共和国』構想を支援してくれた。今後より一層連携を深めていきたいと考えている。JR北海道（宗谷北線運輸営業所）は、様々な形で私たちの運動を理解し協力してくれており、以下紹介してみたい。例えば「北の天文字焼き」関係では、第4回目から駅構内や駅広場横に大規模な雪の台を作り、アイスキャンドルでミニ天文字焼きを描き祭りの雰囲気盛り上げてくれている。ドラム缶の設営、点火、後片づけの3日間共、「太陽ヶ丘」に毎回数十人の人員を配してくれ、まさに体を張って支えてくれているのである。また「見る集い」会場もJR貨物の協力を得る中、設営して頂き吹雪や厳寒な日も予想されるため待機用（トイレもある）のディーゼル車2両も用意してくれているのである。その他急行などでの車内放送によるPRや各駅でのポスターの掲示など協力体制には頭が下がる思いである。また地域イベントでは、名寄の踊りはもとより、美深町での「天の川下り」にイカダで参加したり、毎年開催されている「スタンザム」には、所長・駅長など20名近い職員が参加して頂いているのである。私たちは宗谷本線を「北の星座線」と名付けて運動を行っている。天塩川を「天の川」、国道40号をミルキーウェイ（天の川、銀河）と呼び、これらと併走する鉄道を「北の星座線」と呼ぶのである。いつの日にか、正式にニックネームとして決定し、各駅が例えば「太陽のまち・名寄駅」、「双子座のまち・美深駅」、「大犬座のまち・稚内駅」というようになることを夢見ているのである。その時、「北の星座線」には、“彗星号”とか“ペガサス号”または“昴（すばる）号”とか“北極星”という名称の特急列車が走り、道内外の方々に大変な人

気となるであろう。勿論、夏休みや冬休みに小・中学生の自然体験学習ともドッキングさせ、天体観測と組み合わせルーフ付きの車内から星座の観測が出来るようにするとか、様々な企画を立てられると考えるのである。地元の人達も、出かけるときは地元でキップを買うなどして、売り上げに協力する姿勢が鉄路を残すためには必要と考える。JRもより一層、記念乗車券や入場券にオリジナル性を持たせ、こちらからキップを買ってもらって来てもらうような企画に結びつけて欲しいものである。今後、より一層連絡を密にして地域活性化の方策を求めて行こうと考える。

まとめ

「光の弱い星たちも、星座になれば強い光で輝き始める」という発想の下に、地域の活性化を図ろうとここまで頑張ってきた。お互いのまちや企業、グループなどが手を取り合いお互いをPRし合い支え合うことによって、より相乗効果が出てきて、北・北海道から発信する情報も大きくなり、また回数も増えてきている状況にある。それはまた情報が入って来ることでもある。こうしたヒューマンネットワークを更に広げることが大切と考える。今後、母なる川に同じ思いを寄せている「カヌー」や、北・北海道のおいしい空気や風の中で走る「サイクリング」を楽しむ人達。星座観測や黒点観測を通して子供たちに宇宙への関心を持たそう、そして自らも楽しもうと活動を続けている人達、また寒冷地だけに低農薬・無農薬・有機農業に取り組んでいる人達。冬の生活を楽しむと同時に利雪・親雪活動を続けられている人達、北の自然環境や景観を大切にしようとしている人達など、多くの人達と今後共一層のつながりを深めて行きたいものである。

過疎になることにより、心の過疎が生まれることが一番問題であろうと思う。私達には、「青き海、緑の大地、おいしい水、思いっきり深呼吸のできる空気、やさしく、また時として厳しい風や雪。またキラキラ輝く星座」を共有しているのである。

「北・北海道」のこれらはどこにも負けない財産と考え、こんな共有財産を都市住民にもちょっと「おすそ分け」してあげましょうか？……と考えて、私達は観光地と呼ばれるより「環光地」と呼ばれることに誇りを持ち、これからも頑張って活動をして行きたいと思うのである。

今後共、より一層のご支援をお願いいたします。

北の星座共和国建国推進事務局活動の経過

活動経過期間 1989年9月～1992年9月

☆ 1989年

- 9月 ★ 第1回北・北海道まちおこしサミット『スタンザム'89 in NAYORO』開催
- ★ 北の星座共和国構想を進める『北の星座共和国建国推進事務局』設立
- 10月 ★ 旭川大学の北辰祭祭火リレーマラソン『天』文字に沿って走破
- ★ 風連町の広報紙にて『北の星座共和国構想』の紹介
- ★ 月刊誌「建設と経済」にて『北の星座共和国構想』の紹介
- 11月 ★ 北海道ニュース（道庁・広報課）にて紹介
- ★ 名寄にて、行政の事務担当者会議の開催
- 12月 ★ 美深町にて、第1回・北の星座共和国建国推進事務局会議を開催
- ★ 国道40号を『ミルキーウェイ』と呼称する普及活動の開始
- ★ NHKテレビ「道北79万人の目」のパネラーとして出演

☆ 1990年

- 1月 ★ 稚内にて、「十夢宗谷の冒険」の研修会で『北の星座共和国構想』の事例発表
- 2月 ★ 名寄市・太陽の丘にて「第2回・北の天文字焼き」の開催
- ★ 名寄市のゴルフ練習場に、北の遊星人たちにより「サンショットクルー」と命名
- ★ 北の星座共和国にちなみ、日本酒ワンカップのラベルに6市町村の観光の取組をPR
- ★ 稚内土木現業所歌登出張所で、美深町と歌登町を結ぶ道路のトンネルに「天の川トンネル」と命名
- 3月 ★ 留萌支庁ネットワーク「オロロン9（ナイン）」と「北の遊星人たち」との交流（下川町にて開催）
- ★ 風連町にて、第2回北の星座共和国建国推進事務局連絡会議を開催
- ★ 「北の星座共和国」並びに「北の遊星人たち」のロゴマークの発表
- ★ 「まちおこしサミット in ルモイ」に参加
- ★ 「虹（上川支庁24市町村）のネットワーク」の設立会議に参加（南富良野町にて開催）
- 4月 ★ 北の遊星人・中川支部で国道40号に「夢は北上する！ミルキーウェイ40号」の看板設置
- ★ 北海道社会教育懇話会にて『北の星座共和国構想』の事例発表（士別市にて開催）
- ★ サンロードハネムーン・サンセットウエディングの打ち合わせ（羽幌にて開催）
- 5月 ★ 北の星座共和国ロゴ入り封筒と便箋の製作……各支部に配付
- ★ 北海道自治研修所（江別市）にて、『北の星座共和国』の事例発表

- 6月 ★ 雄武町・日の出岬を出発して羽幌町・サンセット王国までサンセットウエディングの採火リレーを開催
 - ★ 旭川開発建設部の部報にて、『北の星座共和国構想』を掲載
 - ★ 北の遊星人たちのロゴマーク入り「名刺」を製作
- 7月 ★ 「北海道ヒューマンネットプラザ・でしゃばり隊」の発表式に参加
 - ★ 全国キーパースンの会（東京）にて、パネラーとして『北の星座共和国構想』を紹介
 - ★ 自然体験王国北海道（名寄市）において、サンロード（国道239号）を使った企画を採用実施
 - ★ 冠（かんむり）座のまち・豊富町に「ミルキーウェイ（国道40号）」看板の設置
- 8月 ★ 「第1回・天の川（天塩川）下り」（美深町）の開催
 - ★ 山羊座のまち・風連町に滝上支部から山羊のプレゼント企画案内
 - ★ 室蘭市・地域リーダー研修（下川町）にて、『北の星座共和国構想』の事例発表
 - ★ バイク雑誌「月間・Do Bike（ドウバイク）」のカラーグラビアにて、北北海道16市町村を『北の星座共和国構想』のもとで紹介
 - ★ 第2回「スタンザム'90 in SHIBETU」準備委員会の開催（名寄市）
- 9月 ★ 第2回「スタンザム'90 in SHIBETU」の開催（士別市）
- 10月 ★ 第2回旭川大学「天文字」リレーマラソンの開催
- 11月 ★ 美深町にて、ふたご座のシンボルタワー（フクロウ）が完成
 - ★ 上川北部地域の観光開発検討委員会の開催に事務局より1名出席
 - ★ 滝上町より、山羊座のまち風連町に山羊（メーメーちゃん）プレゼント
- 12月 ★ NHKテレビ「道北76万人の目（道北の冬の観光を考える）」にパネラーとして出演

☆ 1991年

- 1月 ★ ミルキーウェイ（国道40号）の呼称が、宗谷観光連盟、上川地方連盟、道北観光連盟、大雪・十勝広域観光連盟のそれぞれの総会で承認される
- 2月 ★ 稚内市・名寄市で開催された『明日の北海道観光を考える会』の会議において北の星座共和国建国推進事務局より「広域による観光振興」の事例発表
 - ★ 第3回「北の天文字焼き」の開催
- 3月 ★ 名寄市にて、第4回北の遊星人連絡会議の開催
- 4月★ 名寄市中名寄のサンロード（国道239号）に、北の遊星人たちなよろ・しもかわ、下川町商工会青年部、まちおこし集団「助っ人」、名寄青年会議所の企画により、広域観光PR看板の設置
- 5月 ★ 車情報誌「オートワン」にて、『北の星座共和国』を紹介
- 6月 ★ 北海道信用金庫協会の広報紙（FOR YOU）にて紹介
- 7月 ★ 下川町「ふるさと交流館」に、北の遊星人たちの発想を取り入れ完成
 - ★ 滝上町において、『北の星座共和国』構想の説明
 - ★ 上川北部圏臨森林型産業都市広域協議会委員として設立総会に1名出席（名寄市）

- ★ 「スタンザム'91 in BIFUKA」準備委員会の開催（名寄市）
- 8月 ★ 「第2回・天の川（天塩川）下り」（美深町）の開催
- ★ 『北の星座共和国』テレフォンカードの製作開始
- ★ 松下政経塾々生、北の星座共和国（北・北海道）を視察
- 9月 ★ 第3回「スタンザム'91 in BIFUKA」の開催（美深町）
- ★ 『北の星座共和国』テレフォンカードの販売開始
- 10月 ★ 第3回旭川大学「天文字リレーマラソン」の開催（北の星座共和国内）
- 11月 ★ 道北観光連盟から、広域観光診断報告書の発刊（天塩川流域から『北の文化』を）

☆ 1992年

- 1月 ★ 第1回「北・北海道サハリン州友好交流の船」の会議開催（稚内）
- ★ 名寄支部の発足
- 2月 ★ 第4回「北の天文字焼き」の開催
- ★ 旭川商工会議所主催シンポジウムにて、「北の星座共和国」を事例発表（旭川市）
- ★ 中富良野町にて、「北の星座共和国」の事例発表（中富良野町）
- ★ サンロード・バレンタインツアーの実施
- 3月 ★ 上川支庁北部耕地出張所管内研修会にて、「北の星座共和国」を事例発表
- ★ 遠別町広報紙にて、「北の星座共和国」を紹介
- ★ 宗谷支庁・十夢宗谷の冒険主催のシンポジウムにて、パネラーとして参加（豊富町）
- ★ 道新Todayにて、「北の星座共和国」を紹介
- ★ 第6回遊星人連絡会議開催（風連町）
- 4月 ★ 風連町広報紙に「地上に降りた北の星座共和国を紹介」
- 5月 ★ 上川地方観光連盟の広域マップにミルキーウェイとサンロードを掲載
- 6月 ★ 北・北海道サハリン州ヒューマンネットワーク交流事業の実施
- ★ 北海道新聞のコラム『北風林』に、北の星座共和国を紹介
- ★ 北海道林務部長と上川北部森林型産業都市構想推進の懇談会
- ★ 下川町にて花と緑いっぱい運動の展開
- 7月 ★ 美深町『双子座館』オープン
- ★ 北の星座グッズを双子座館に展示販売
- ★ JR北海道宗谷北線増収会議にて、北の星座共和国構想について説明
- ★ 名寄市役所にて『北の挑戦』の取材を受ける
- 8月 ★ 静修短大REC北海道環境文化研究センターより地域活動の助成金（200,000円）
- ★ 和寒支部発足
- ★ 「第3回天の川下り（天塩川）」（美深町）の開催
- ★ 第4回「スタンザム'92 in WASSAMU」実行委員会の開催
- ★ 全道ミニ独立国サミット（室蘭市）に参加
- ★ 「第1回剣淵川カヌー下り」（士別市）の開催

- 9月 ★ 星座グッズの展示販売
- ★ 東京にて星座グッズの打ち合わせ
 - ★ 名寄市の観光パンフレットに「北の星座共和国」のイラストマップを掲載
 - ★ 宗谷支庁管内「地域づくりフォーラム in 枝幸」に参加
 - ★ 旭川開発建設部主催「道路整備に関する地方ブロック会議」に出席
 - ★ 道北観光連盟担当者と北の遊星人たちとの意見交換会に参加

この他にも、多くの方の協力により様々な事業を行うことができました。
ありがとうございました。

For Developing a New Item of Local Products:Report on Community Making Activities
of Northern Hokkaido Regions, noted By Munetaka KOSHIZUKA, REC TECHNICAL REPORT,
No.0007[SS360]Feb,1994,HOKKAIDO RESEARCH CENTER OF ENVIRONMENT AND CULTURE
SEISHU GAKUEN, SAPPORO 004 JAPAN.

○執筆者紹介

(報告書)

北の星座共和国建国推進事務局

代表：谷 一之 (たに かずゆき)

北海道下川町を拠点に、北海道に属する約40市町村のまちおこしグループを結集して1989年9月から建国運動を展開。交流活動・イベントを中心に斬新なアイデアで活躍中。

(解説)

越塚 宗孝 (こしづか おねたか)

北海道環境文化研究センター主任研究員

静修短期大学助教授

平成6年2月1日 発行

編集：北海道環境文化研究センター

発行：(学)静修学園 和野内 崇弘

〒004 札幌市豊平区清田4-1-4-1 ☎(011)881-8844
